

## ドストエフスキ研究会便りについて

ドストエフスキ研究会

(主宰者) 芦川進一

### はじめに

#### 1. 河合文化教育研究所について

河合文化教育研究所が設立されたのは、バブル経済が最盛期を迎えた千九百八十年代の半ばでした。この研究所設立の出発点となったのは、物質的経済的繁栄のみを追う日本社会を向こうに、予備校「教育」の現場から初めて可能となる「文化」を産み出そうではないかという理想でした。

その理想を実現すべく、研究所に関わる全員が土台としたのは予備校という教育空間の独自性であり、そこから自らに課したのは、浪人という極めて不安定な状況に置かれた若者たちに、受験勉強に真剣に取り組ませるといふ、まずは予備校として当然の課題でした。これに加えて課されたのは、彼らの揺れ動く鋭敏な感性と知性に対し、この時期にこそ世界の一流の知的巨人たちとの対峙を迫るといふ課題でした。これら二本の柱によって、二十歳前後の若者たちに人生を貫く知的探究への基本的意欲と姿勢とを身に着けさせよう、その上で彼らを大学に送り出そう、このような「教育」への課題と理想を追求することから、予備校独自の「文化」を生み出す土壌も育まれるはずだ、このような展望の内に文化教育研究所が生まれたのでした。今思い起こしても、それは地に足の着いた「文化」への展望であり理想、そして「教育」への姿勢であったと思われまふ。

当然のことですが、それと同時にこの文化教育研究所に集った全員が、予備校「教育」の現場でする努力と表裏一体の形で、各自それぞれの専門分野において「文化」に向けた地道で誤魔化しのない努力を自らに課したのでした。若者たちとの対決と、世界の一流の先哲・知性との対決、そして自分自身との対決。—— 少々青臭い表現が続きますが、これら三層にわたる緊張感こそが、歩み始めた研究所の事務局員と研究員とを支え、そして衝き動かす目に見えない力であり絆であったと私は理解しています。

#### 2. ドストエフスキ研究会について

ドストエフスキ研究会もまた、河合文化教育研究所の東京地区に属する一研究会として、上のような雰囲気の中に出発しました。以来30年近く、河合塾で受験生活を送り大学進学を果たした若者たちが再び河合塾に戻り、自由にこの研究会に参加し、ドストエフスキと聖書テキストの講読を続け、そして社会に巣立ってゆきました。ここで学んだ若者たちは1000人を超え、最初期の参加者たちは既に50歳を迎えようとしています。研究会の活動形態や取り上げる内容も様々な試行錯誤を続ける中で変化し、幾多の問題を孕みつつも、それなりの個性ある歴史を刻んできたように思います。

現在の活動は、従来のように多数のメンバーが集まった研究会の形式を卒業し、社会に

出た後、自らが直面する現実の中で改めてドストエフスキイを学びたいとの強い問題意識を持つに至った人たちの中で、再び自らこの研究会の門を叩いてきた人たちを受け容れ、主宰者芦川が彼らとの間で二～三人単位での個別的研究会を持つという形を取るようになっています。これも長い時間の中から自然に生まれ出た形式として、新しい「寺子屋」的な学びの場を念頭に、暫くはこの試みを続けてみようと思っています。

芦川自身のドストエフスキイとの取り組みは、河合塾本科での授業と、研究所での若者たちとの研究会と並行して続けられてきましたが、漸くこの夏、ライフ・ワークのカラマーゾフ論が完成するに至りました。この間に研究会の場で私が学んだ最大の教訓の一つとは、若者たちと接する時、彼らと共に「問い」の前に立つことを止めて「教え」の立場に立つ時、ドストエフスキイを学ぶことは生命を失うということでした。「教える」立場にある者が、むしろ様々な点で「教えられる」ことの多かった30年です。今もなお生きて働くドストエフスキイ世界の奥深さと豊饒さを前に、常に若者たちと同じ学ぶ姿勢で、謙虚にこの作家が突きつける「問い」の前に立つこと、これがそのまま冒頭にも記した、河合文化教育研究所が設立された当初の理想を保ち伝える姿勢であると思っています。ここで私がどのような若者たちと出会ったかについても、その内に「研究会便り」で報告する予定です。

### 3. 「ドストエフスキイ研究会便り」について

芦川のドストエフスキイ研究に一つの区切りがついた今、ドストエフスキイ研究会30年の活動についてもここで一度正面から振り返り、後に続く人たちのための参考となり「叩き台」となるような記録を残しておく時ではないかと感じています。

これから何年かにわたり、それらを「ドストエフスキイ研究会便り」として形にしようと心に期しているのですが、この「研究会便り」が向かう所は、決してただ単に「昔懐かし」的な回顧ではありません。しばらくは拙著『カラマーゾフの兄弟論』の「後産」として、カラマーゾフ世界との取り組みを続けますが、それを終えた後、私の視野の内にあるのは、五年後に控えた東京オリンピックの翌2021年、ドストエフスキイ生誕200年です。その時にも恐らく、マスコミ・ジャーナリズムの商業主義と、それに乗った安易なドストエフスキイ論が世に流されることでしょう。そのような中でこの「研究会便り」が、将来ドストエフスキイと正面から取り組む人たちが、ひたすら厳しく誤魔化しの無い修業を積む場を提供出来ることを心から願っています。

具体的には「ドストエフスキイ研究会便り」に触れる方たちが、まずこの研究会ではこの30年どのような作業が続けられ、どのようなことが問題となってきたのか、それらの問題についてメンバーの間ではどのような討論がなされてきたのか、またどのような問題がなお答えの出ないままに検討されているのか——これらのことについて知って頂ければと思います。当分の間はなお「カラマーゾフ論」の提示が続きますが、皆さんも人類の遺産たるこの大作品と親しみ、この世界を介することで人間や世界や歴史が如何なるもの

として見えてくるのか、我々は如何なる問題の前にいるのか、超越は我々とどう関係するのか等々の問題を、正面から考える契機として頂ければ嬉しく思います。

(2016年夏)

### **「研究会便り(2)」について**

今回は「研究会30年の活動」というタイトルで、ドストエフスキイ研究会の活動の大きな流れを、5つのテーマに沿って報告し、それらと芦川が今まで発表した仕事との対応を記します。